

# 現在善知鳥

シテ

獵師

ワキ

卒都浜領主

トモ

従者

所

陸奥卒都浜

「加様に候者は。みちのくそとの浜の領主何某にて候。扱も我毎年此所にて鷹狩し心を慰み候。当年も又狩を催す処に。物数不足にて思ひの儘ならず候。あまり本意なく候へば。出でからばやと存候。

歌  
「箸鷹の時定めぬ松島や。く。小島の蟹の塩衣。袖の渡りに波寄て。蘆の村立音たかき。風にや鳥の噪ぐらん。く。

ワキ詞  
「いかに誰か有。

トモ  
「御前に候。

ワキ  
「同勢の内に声高く聞え候ば。若能鳥取て有か聞候へ。

トモ  
「畏て候。シカぐ

トモ  
「承候へば。吉澤殿より上られ候御秘蔵の御鷹をそらし申たると申候。

ワキ  
「扱鷹匠共は何としたるぞ。

トモ  
「向ひの山越に鈴の音聞え候間大勢参候が。今に居

上候共申来らず候。

ワキ

「言語道断。 いつに替り当年は。 鷹狩思ひの儘ならず候に。 今日は又秘蔵の鷹を失ひ。 何とすべき共わきまへず候。 かく長居してせんなし。 はや帰らふづるにて有ぞ。 鷹の事をば随分申付候へ。」

トモ  
「畏て候。 御立腹御尤にて候。 今日は御慰御座なく候間。 此山陰を向へ御越なされ。 沢伝ひに御帰。 景をも御覽有て然べう候。」

ワキ

「さらば向へ渡らふづるにて候。」

シテ、一声

「面白やそとの浜成呼子鳥。 声にやさそふ心哉。」

サシ

「浅ましやなす事なくて徒に。 殺生を經營。 頭には霜を戴き。 四海の波身に打よれども。 さらに後世を弁ず。 何方の山此方の沢に。 邪見の杖に簾笠。 科なき鳥を追立く。 流し網さし縄に。 懸れる鳥の数々も。 来世の責の恐ろしさよ。 遁るまじきは

報ひかな。

詞

「よしなき事を思ひて候。鳥をおゝふずるにて候。

又是へ人の余多見えて候。喃喃旁々は何方へ御通り候ぞ。

ワキ 「是は年々向ひの山を鷹狩する者なり。けふは秘蔵の鷹を失ひ。心よからず帰る者也。扱汝は如何成ものぞ。

シテ 「是は此そとの浜の猟師にて候が。若年より殺生を好み。鳥取世を渡る者にて候。

ワキ 「扱は幸成事なり。汝が殺生の手立を見せ候へ。

シテ 「さらば鳥取つて御目にかけ候べし。去ながら。

カル 「頭に雪の積るまで。かゝるしわざは愧しや。

ワキ 「あら愚や老とても。今の楽しみ有なれば。来世も何か苦しみあらん。

シテ 「さて出立し我が姿。簾は解脱の衣にて。

ワキ 「柱杖を表す竹の杖。

シテ 「笠は八葉蓮花なれば。

ワキ 「濁りにしまぬ。

シテ 「水鳥を。

同 「追廻しへて。隙なく鳥を取時は。罪も酬ひも後の世も。忘れ果て面白や。老のおもひ出成らん。未来はとにもかくにも。

クセ 「先春は長閑にて。鳴音妙成鶯の。声に雪消し跡にやそだつ村鳥。夏の空は一入唯声ゆかし時鳥。心有人々の。うちぞ床敷そとの浜。外面の雨濡々し。

早乙女の帰るさに。笛やたゝくはくひなか。

シテ 「秋は元来雁金の。

同 「雲井に渡れる空もあり。又水に宿るは。おしかもめさぎすら。鳴立沢は余所にだに。ありとは聞ど所がら。名取の川やなこその関。冬川に成までも。千鳥やよるらん。いざいざ取りて参らせん。

ワキ詞 「近比面白き者に参逢て候もの哉。急いで鳥を取候へ。

シテ、カヽル

「あれへく御覧候へや。おもはぬかたに集る鳥の。

跡をしたひて能みれば。

同「はかなや此鳥の。く。木々の梢に波の浮すかけ。

又は平砂に子を生かくせる。あかたの鳥の。うとふと呼れて答ふるぞや。

シテ「うとふ。(カケリ)

同「蓑笠杖を押取持て。く。爰やかしこの草村深山。木々の梢に巣をくふ鳥ならば。げに松島に多かる

らん。

シテ「是々み給へ人々よ。

同「是々み給へ人々よ。老の振舞はづかしながら。稀人に慰みの殺生の有様。是までなれや。御暇申と立帰れば。狩人名残を惜み給ひ。見送り帰らせ給ひければ。

シテ「我は其時去にても。く。

同「今日の殺生面白や。身にも応ぜぬ老のわざながら。

若年の比よりかく殺生の罪は怖しや。然りとはい  
へども。一日の栄花ぞ老のおもひ出。けふの狩場  
を今陸奥の。けふの細布胸逢がたき。簾笠着てこ  
そ帰りけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会編